かぐらおか

（題字は前学長　山田守英氏）

第 43 号

昭和60年３月15日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　第５学年学生　中里友彦）

東神楽より

（表紙写真募集中!!）

第７回卒業生を送るにあたって…黒田一秀…２
卒業生を送るにあたって……天羽一夫…３
卒業にあたって……大見広規…４
６年間の想い出……竹本幹子…４
喫茶店の内の旭川……黒須昭博…５
昭和59年度講演会一覧……６
１年のあゆみ……７
研究室紹介……平塚寿章…９
駐車場問題専門委員会から……９
スキー教室……10
学生証の査証及び交付について……10
サークル紹介……10
窓外……建部高明…22

第7回卒業生を送るにあたって

学長　黒　田　一　秀

一般に思いつきというものは、人が精出して仕事をしているときにかぎってあらわれる。

―マックス・ウェーバー
尾　高　邦　雄　訳　「職業としての学問」―

卒業おめでとうございます。医学士というと少々古めかしいのですが、一つの社会的責任能力を表す称号を獲得されたのです。一般教養学、基礎医学、臨床医学、最後に臨床実習と、6年間にわたって展開されたながい道のりを歩き通したのです。一つことをなしとげた達成感はさぞかしと思います。

7回生の皆さんは学生定数 120名の最初のクラスであり、入試に共通一次試験をとり入れた最初の受験生が主体で、共にしてきた教職員にとってもほんとうに嬉しいことであります。皆さんの先輩である本学卒業生の数は546名で北海道はもとより全国各地また海外でも、医学医療の最先端で、まことによい活動をしています。

皆さんはその新しい仲間として仕事をはじめるわけであり、世間の人々も大きな期待をよせているのであります。

さて最近医師数過剰の声が聞かれるようになってきました、新卒業生として不安を感ずる人もいるかと思います。しかしこの問題は、医師の現状を、在来通り不変のものとみての議論です。将来を荷う皆さんは変ってゆく医学医療社会のなかで十分適応してゆく力を持っている筈ですし、よい医師、よい研究者をひとは棄てておきません。

冒頭にマックス・ウェーバーの言葉を掲げました。皆さんが、これから自由社会のなかで、自立して自分の道を進み人と協調してゆけるためには、自分の考えを用意していなければなりますまい。枠のなかで無反省に暮しているだけでは枠がはずされたら動けません。精出して自分の仕事をしているとき、新しい展望がひらけ、自分の考えが発展するのです。そして、興味をもって集中しているその時に限って「思いつき」が生れるのです。恒にかわらず仕事につとめている人にだけ天啓があるのです。若々しい情熱をもって選んだ道を怖れず急がず休まずに進んでほしいと思います。

振り返ってみると、学生のときは自学自習といってもお膳立てされた学問の成果のあとをたどってきたに過ぎませんが、とにかくその医学の大要を学んだのです。人の知らない専門的知識を沢山獲得したのです。「知識は人を誇らせ」るという言葉がありますが、まことに専門知識は深くなればなるほど興味が湧き、また満足も得られます。しかし学問知識自体にはそもそもそんな意味はないのです。わたしたちがそれで得意になることも、それを人のために役立てることも、所有者御当人の問題なのです。そして近年ますます技術の進歩が激しく、今までできなかったことができるようになり、もっと進歩すれば、何でも解決しそうに思ってしまいます。ですがよくみるといつも科学技術の先端のところで、人間の野蛮も顕になっているのが事実です。医学は人間についての生命科学なのですが、この人間というものは医学だけでは処理できない問題を同時に沢山もっているわけであります。学校の医学には医学の限界についての反省が足りませんでした。あっても人にまかせてきました。

皆さんの卒後の学問は成書にまとめられたものではありません。今までの蓄積を土台にして、これからは医の発展を担当する当事者になるわけです。どんな形で医を仕事とするにしても、生涯にわたって自分の学問を反省しまた楽しみ、さらにあとに続く人々を直接間接に援けるのであります。一方では医を実践する専門人として、一方では社会の生活者として、論理的に考え、好悪の感情を味わい、自分の信ずる価値に従って決断する毎日を送ることになるのです。つまり学問といい科学といっても人間が関わってくるのです。このことは医学医療の世界ではことさら大切で、何度いってもいい過ぎることはありません。

学校でわたし達が勉強したのは、知識の部分だけ、採点できる事柄だけのように極言してしまいました。しかしわたくしは実際には心配していません。学生時代に皆さんが交友を通して得た学問以外のこと、先輩同僚後輩間の友情の絆こそもう一つの卒業証書だと思うからです。学生時代の経験には恐らく生活者としての深さはないでしょう、その代りもっと純粋であったと思います。その友情を卒業生同志として育て、さらにあなたの接するすべての人々に拡大して下さい。これが私達の生涯学習の大切な側面であると信じます。

人は身体(ボディ)と魂(マインド)と精神(スピリット)との3つのものが一つになっているといわれます。人間への深い理解を求めて、生涯の第2のスタートラインに立つ卒業生お一人お一人に心からのお祝を申し上げ、健やかな御発展を祈ります。

卒業生を送るにあたって

天　羽　一　夫

医者の最上の治療とは、みずからを治療する人間を出現せしむるにある。いまだ踏み行かれたことのない数千の径がある。数千の健康がある。また数千の隠れたる生命の島々がある。人間と、人間・大地とが発見されていないこと、いまだ無限である。

—竹山道雄訳「ツアラトストラかく語りき」から引用—

叔父は明治42年生れで75才になる。京都の理学部で生物学を修め、故郷の徳島で30余年教員を勤めた。夏休みには海辺に連れられて海草や貝を集め、山野を歩いて草木や鳥を眺めた。学生の教材集めだったらしいが、連れられる分には気楽なもので、タヌキノショクダイやギンリョーソーなど滅多にお目にかゝれないものも見られたし、無人の山頂で野宿して真夜中のヌエの声を聞き、朝にはホトトギスが翔ぶのを眺め、カゴシマアオゲラが山寺の雨戸に穿った孔に興味深く触れたこともある。

当時の鳴門はまだ田舎町で、海岸を通る国道11号線もなく、浜辺には千鳥と呼ばれるハマシギやチューシャクシギが群れを作り、田圃にはシラサギが優美な姿をみせていた。シラサギは風に弱く夜は竹林の中に作った塒に帰るが、台風のあとの死傷は多い。地面に落ちていたチューサギは暫く家の中で傷を癒していたが、野性の餌付けは難しく、今は剝製になって往時を偲ばせる。

昭和20年に街はすべて灰になり、樹木も無くなった。山野を歩くうちに次第に鳥に興味を持ちはじめた叔父は鳥を呼ぶため、山から藁を採って植え続け、祖父の作った日本風の庭と違って雑木林と呼ぶ方が良いような屋敷となり、樹の種類も 400種を越え、街内では数少い風景となったが、結構、鳥はやってくる。座敷に坐って眺めながら行動記録を克明にとり、天気の良い日には、珍らしい鳥が居ると聞けばオートバイで馳けつけるような日々を送っているが、昨年40余年の記録を整理して“徳島野鳥の記録”と名付け、表紙は声のブッポーソーを画いて出版した。

樹があると鳥もくるが、いろいろな虫も集まる。夏の昼間は庭に出るには蚊を避けるのに相当苦労するが、夜は家の内に居ても、窓に灯を求めて集る虫は結構多く、数年前から蛾を採りはじめた。その殆どは食性からみて庭で育ったものらしい。もう 300種余りになったので、今度は蛾の本を出すんだと張り切っている。

その妹の叔母もまた変った人とも云へる。東京に居を構へ、芸術科出身なのに漢学に親しみ、今は湯島の聖堂で易経と論語を講じているが、こちらも若い頃から詠みあつめた短歌を、昨年、“森の声”と題して出版した。御両人とも日頃口には出さなかったが、日記をつけるように克明に日々の事を記録するには、仲々の努力があったこと、思う。

私は医局に入り仕事に明け暮れた20代、30代は、酒を汲むのに追われ、他人の忠言も耳にせず、仕事の記録さえも失くするような狷介、不肖の甥である。私の God mother のBaggs 師は昨年英国で90才で神に召されたが Stephen と云う洗礼名を頂いている。使徒行伝によるとキリストの弟子で最初に石で打たれたと云う。相当に頑固、狷介な人だったとみえるが、人生の半ばを過ぎ、漸く自分のこと、また世間の事が判るにつけ、Baggs 師もよく人をみられたものと、過ぎた自分の人生を誠に恥ずかしく思う。

今、諸君は大学という社会から隔絶された楽園ともいうべき場所で、社会に生れ出るまでの６年という自由な期間を終えた。この間に友情の淳さ、病める人への情、生命の尊厳などを覚ったこと、思うが、更に人生の終りになって悔の残らない生活の下地を、今後、若い間に培うことに努めるべきだと思っている。ヘブル書は“それ地しばしばその上に降る雨を吸い入れて、耕す者の益となるべき作物を生ぜば、神より祝福を受く。されど茨と薊を生ぜば棄てられ、かつ詛に近く、その果は焚かるるなり”と教えている。智識を受けても、これを深く理解しなければ、やがては世の為にならなくなってしまうであろう。

諸君は今、将に王維の吟じたごとく、陽関を出ようとしている。門出に際して柳枝を贈り、諸君等若き医学徒の前途に祝福あれ、と祈るや切。

（第６学年学年担当　放射線医学講座　教授）

卒業にあたって

大見広規

卒業にあたって何か書いてほしい、と言われましたが、私のように他の大学を卒業してきたような、「ひねた」学生は、代表としてはとても適任とはいえず、お断りしようかと思いましたが、学生課のかた達とは浅からぬ因縁もあり、引き受けることになりました。

「はて、自分はこの6年間いったい何をしてきたのだろうか。また、それはどんな意味があったのだろうか。」と考えてみましても…頭のなかみでは、かつて専攻した物理学はあらかた蒸発してしまうし、かと言って、医学の知識では、試験だけはとりあえず通ったものの、それが終るとすぐに忘れてしまって、いざ臨床実習などとなると、何かと足りなさ、至らなさばかり思い知らされる有様でしたし、まして精神的な意味となると、しょっちゅう医師としての精神の云々などと聞かされているにもかかわらず、というべきかそうだからというべきか、ともかく入学当時医学部を志した気持も6年間のうちにかなり風化しているようで、一向にまともな答えがうかんできません。

というわけで、全く困ってしまい、先輩達は何と書かれているものやらと、古い「かぐらおか」を引っぱり出してみたわけです。まず気のついたことは、私が入学して最初に頂いた「かぐらおか」に載っておりましたのが一期生の先輩の卒業にあたっての言葉でした。丁度私達七期生でひとまわりした次の、いわば第二の世代に当るわけです。定員が120名に増え、最初の共通一次の世代であり、四本足の鶏、四枚羽根のある蠅を画いた学年でした。入学した時には既に教室は立派に完成していましたし、周辺の緑が丘にはそれなりに住宅も多く、スーパーマーケットや銀行もあり、一期生、二期生の先輩達の言われるような創立当時の雰囲気を、もはや感じることもなかったように思います。十年近くたってもはや創業期というよりも、良くも悪くも次の世代の学年であったように思えます。三期卒業の先輩の言葉に「七・八期生を迎える頃になると学内の雰囲気も次第によそで見られる管理社会の様相を呈してきて……。」ということもあるいはあったかもしれません。

さて、私はこれといったクラブ活動もしたわけではないので、いろいろな講座におじゃまさせていただいたことでも書いてみます。

旭川に来て本学に入学して感じたことは、休日など町へ出てみると必ず顔見知りに会うような小さな町で、しかも単科大学であるためなのか、一種独特な「医大」という社会があり、悪くすれば過干渉かな、という感じ、一方、良い所は家庭的とも言ってよいかと思いますが、先生がたの所へもわりと気楽にお話に行ったり、少々無理もお願いできそうな雰囲気のあったことです。元来の厚かましさで、三年生の頃からは、基礎の講座にあちこちとおじゃまさせていただきましたが、どの講座でもおかげさまで快くむかえていただきました。

細菌学講座では実習で見た培養細胞がとても綺麗であったことから、実習後に行って細胞培養の方法を教えていただき、引きつづいてインターフェロンについての実験を少しだけ手伝わせていただきました。薬理学講座、これはもう、大変お世話になった所でして、セミナーやカルシウム拮抗剤の虚血心筋に対する実験…いや、むしろ宴会には…しょっちゅうおじゃましておりました。そして寄生虫学講座へは専ら遊びに…お世話になった各教室の先生がたに「最敬礼！」

医学部の学生は、他の学部の学生と比べると、非常によく勉強して(させられて？)いると思います。ともすれば試験、試験で、思わず「こんなの専門学校みたいだ。」とぼやきたくなる時、教科書に書かれてある知識そのものをただ覚えるのではなく、その知識がどのようにして得られたかということを、ちょっとのぞいてみることはなかなか楽しく、失われかけた興味を取りもどすのに役立ったように思いました。

卒業といっても、役に立つだけのものも一向に習得できてないような気がしますが、楽天的なところと、少々厚かましいところでもって、まあぼちぼちやっていこうかと思っています。

最後に、いっしょにすごした同期のみんなへ、いい6年間でした。これからもずっと同期としてよろしく。

(第6学年学生)

6年間の想い出

竹本幹子

私にとって、6年間はアッという間に過ぎ去ってしまった感じがします。振り返ってみると、スキーだけは、思う存分やったなあという感じがします。スキーは、大学に入ってから、マメに通ったのですが、同じ学年にスキー気違いが多く居たことが、その原動力の一つになったと思います。スキー同好会“白い恋人”は、私達の学年からスタートし、この同好会で私は色々なことを学びました。みんなで滑ることの楽しさを知り、何よりも、スキーを通して自然に接し、その素晴しさを肌で感じたことは、本当に良かったと思います。今思えば、旭川という大自然に恵まれた土地で、大学生という時間だけはたっぷりある時期を過せたのは、私にとって幸せでした。

旭川の街に初雪が散らつく頃、大雪山系では新雪がふ

りつもり、待ちに待ったスキーシーズンの開幕です。私達は、ルンルン気分で初滑りに出かけます。ブッシュの目立つゲレンデを、足にまだ馴染んでいないスキーで、今シーズンの期待を胸に滑ります。こうして一時の楽しみを味い、山を下りると、ふもとでは学生にとって避けて通ることのできない試験シーズンも開幕しています。悲しいことに、この試験を乗りきらないと、私達にとって本当のスキーシーズンはやってこないのです。試験最終日、前日から体調を整えておいた私は、朝からソワソワと落着かず、終わるとすぐさまサンバレーに直行。ナイターの照明の中、粉雪がチラチラと舞い、旭川の夜景を眼下に滑る爽快さは、何度経験しても良いものです。毎年毎年、“試験が終ったら、スキーに行けるんだ”と思って試験を乗りきってきたように思います。

春、うららかな日差しの中、何も考えず、何もかも忘れて、ただ自由だけを感じて滑ります。

5月、近郊のスキー場に雪があとかたもなく消えてしまうと、私達は、雪を求めて十勝岳や旭岳や黒岳に登ります。登りは、スキーがずっしりと重く肩に食い込み、いっそスキーを捨てて行こうかと何度も思います。でも、これに耐えて頂上にたどり着くと、見わたす限りの稜線と、美味しいビールが待っています。何時間もかけて登った山も一気に滑り下りると、後は、充実感を残すのみです。

初夏、私達はさらに雪を求めて、旭岳や赤岳の雪渓に行きます。もやの立ちこめる中、汗だくになりながら登ると、緑からパッと白い雪面が広がり、まさしく別世界です。暑い夏の雪渓スキーと厳寒の深雪こそ、この世で最高のぜいたくだと、私は信じています。

それから、印象深いのは、スキー部で過した1シーズンです。少しでも速くなること以外は考えずに過ごした1シーズンは、私にとって最高に幸福でした。レースを経験することによって、視野が広がったように思います。

今、旭川の街は、あたり一面マーブルチョコレートを流したようになる雪解けの季節を向かえようとしています。6年前のこの季節に、新しい世界に胸をときめかせてこの街にやって来たことを昨日のことのように思い出します。幼かった私は、多くの友人、先輩後輩と出会うことによって少しずつ成長していったように思います。

6年前もそして今も、旭川の空はカラリと晴れわたり、その青い空には、澄んだ瞳が一番似合うと信じています。

いつまでも、澄んだ心で真直ぐに見つめて行けたらと、思っています。

6年間共に過ごしてきた仲間たち、私が無事に卒業できたのも、みんなのおかげです。泣いたり、笑ったり、ケンカしたり、目を閉じると、スキーをしている姿、ラグビーをしている姿、テニスをしている姿など、一つ一つのシーンがビデオテープのように映ります。

最後になりましたが、楽しい想い出をたくさん、本当にどうもありがとう。　（第6学年学生）

喫茶店の内の旭川

黒須昭博

2月下旬とは言え、ここ数日暖かい陽気が続いたせいか、道路の根雪も大分弛んできた。聞くところによるとこの陽気は、3月下旬の陽気らしい。僕の住むアパートの階段に積った雪も、何時の間にか解けてしまい、ひと足早くコンクリートが顔を出している。例年なら、今頃でも階段から滑り落ちない様に、気をつけて降りなければならないのに。吹く風も、大分凌ぎやすくなった。春一番も、もう少しといったところか。店の前を通る人々の足どりも、心無しか軽く見える。コーヒーの香の中、僕は窓の外を眺めながら、ふと感慨に耽ってしまう。『旭川に来て、もう6年間が過ぎてしまったのか……』

僕が初めて旭川を見たのは、今にも落ちてしまいそうな、YS－11の窓からであった。空の上から見る旭川は、真に白い世界。山、樹木、家並、目に映るすべての物が白一色に塗られていた。その中に、まるで吸込まれるかの如く、飛行機は空港に着陸した。『春は近いというのに、何てここは寒いのだろう。』これは、僕がタラップを降りる際に感じた、旭川に対する第一印象であった。肌を刺す風は、春の足音を吹き消していた。頬は強張り、吐く息が白く風に舞う。僕は、首をすぼめ、ポケットに深々と手を入れて歩いていた。

入学当時、大学の近くには住宅しかなく、喫茶店やパチンコ屋が立ち並ぶようになったのは、ここ2～3年のことである。「ママ。この店、何時ごろ出来たの。」ママは、指折り数えはじめた。

「卒業おめでとうございます。」たった今、店に入ってきた後輩が、僕に話しかける。「もう卒業だなんて、早いですね。」僕自身、確かに早いと思う。しかし、過ぎてしまえば、何でも短く感じるものではないだろうか。

「これ、分りますか。」彼は、カバンの中から、何やら一枚の紙を取り出した。試験問題である。こいつには、僕もよく泣かされた。僕の場合、試験はいつも綱渡りであった。次々と同級生が留年していく中、今年こそ僕の番に違いないと、毎年覚悟を決めたものだ。こんな時、実家から電話があると、必ずこう言った。「今年はダメかもしれない。」両親も、最初の頃は大変心配し、気をつかってくれたが、毎年繰り返されるこの会話に、次第に動じなくなっていった。

彼が帰ってから、大分時間が過ぎた。店の外はかなり暗い。この時刻になると、店は昼間の顔から、夜の顔へと変わる。さっきまでかかっていた静かなジャズも、今はポップなミュージックに変わっている。次第に常連達が集まってきた。マスターは、さきほどからダーツに夢

中である。店の中は、和気あいあいとしたムードに包まれる。その内、常連の一人である後輩が店に入ってきて、カウンターに本を投げるようにして置くと、僕と一つおいた席に座った。「こんちわ」彼が言う。彼は5年生であり、彼の持ってきた本は、見るからに難しそうな医学雑誌であった。「レポート書くためには、必要なんですよね。」彼はそう言うと、食事を取りながら、黙々と読み始めた。僕は、あの頃を振り返ってみた。『そう言えば、よく教授に叱られたっけ。』中でも印象に残る科は、皮膚科と放射線科であった。皮膚科では、ポリクリ中に繰り出す教授の質問に、ことごとく答えられず、教授はあきれて、「君たち。こんな事では卒試に通らないよ。私が保証してあげよう。」と言われてしまった。とんだ教授の御墨付である。放射線科でも同じように、教授の矢の様な質問に対し、「わかりません。」「すいません。」を連発していたら、教授に「わかりません。すいませんで済むと思っとるのか。」というお言葉と一緒に、"大学一周" 命令を頂いた。おそらく、臨床実習中に大学一周を命ぜられたのは、僕が初めてではなかろうか。それにしても、よく卒業できたものだ。

「ママ、ビールちょうだい。」透明なグラスが、たちまち琥珀色に変わる。『実にいろいろなことがあった。』グラスを見ながら、そう思った。出会い、別れ、信頼、裏切り、様々なことが、思い出というスクリーンに、次々と映し出されては消えていく。まるでグラスの中の泡の様に。『よくここまでやってこれたものだ。』僕は、僕を助けてくれたすべての人々に、感謝したい気持ちで一杯になった。

「ママ、もう帰るよ。」勘定を済ませると店を出た。夜の風は、春は近いとはいえ、まだ寒い。おまけに、雪までちらつきだした。春は、まだおあずけと言ったところか。

（第6学年学生）

昭和59年度講演会一覧

昭和59年度本学で開催された講演会は次のとおりです。

開催日	演題	演者	担当講座
7月13日（金）	NMRの医学応用の現状とその展望	岡崎国立共同研究機構生理学研究所教授 亘 弘	実験実習機器センター
8月3日（金）	最近の臨床神経生理学の進歩	千葉大学医学部教授 本間三郎	生理学第二講座
9月6日（木）	腎不全及び腎移植に関する基礎的並びに臨床的な問題点	大阪大学医学部助教授 高羽津	泌尿器科学講座
9月19日（水）	癌末期患者の鎮痛法と問題点	北海道大学医学部教授 古川幸道	麻酔学講座
9月27日（木）	肺癌の病理と臨床像	滋賀医科大学医学部教授 岡田慶夫	外科学第一講座
10月4日（木）	十二指腸潰瘍と迷切	広島大学医学部教授 江崎治夫	外科学第二講座
10月29日（月）	ペプチド性伝達物質について	東京医科歯科大学医学部教授 大塚正徳	薬理学講座
2月22日（金）	免疫系のしくみとその人工的制御	大阪大学細胞工学センター教授 岸本忠三	病理学第二講座 泌尿器科学講座

（庶務課）

昭和59年

4月

12日　保健管理センター所長事務取扱に石井副学長が発令された

13日　昭和59年度入学式（於　体育館）
〔新入生 120名（内女子学生21名）〕

23日～24日　新入生研修第1回目（於　第1セミナー室・第2セミナー室・和室・一般教育会議室）

新入生研修（第1回目）

5月

17日　第77回医師国家試験合格者発表
（本学合格者96名　合格率99.0％）

6月

14日～17日　第10回医大祭
テーマ「10年目の脱皮！やるぞガンガン
―限りなき成長を目指して―」
（大学祭実行委員会委員長　深町知博）

第10回医大祭

30日　学位記授与式（於　学長室）
（学位記授与者4名）

7月

7日～9日　第31回北海道地区大学体育大会
（当番校　北海道大学）
〈本学参加種目〉陸上競技（男女）・準硬式野球・軟式庭球（男）・バスケットボール（男）・バレーボール（男）・サッカー・バドミントン（男女）・剣道（男女）・弓道（男女）
〈本学参加学生数〉　151名
〈成績〉男子30大学中24位　女子32大学中18位

21日～8月10日　第27回東日本医科学生総合体育大会夏季大会
（主管校　聖マリアンナ医科大学）
（弓道部門移管校　旭川医科大学）
〈本学参加種目〉陸上競技・準硬式野球・硬式庭球（男女）・軟式庭球（男）・卓球（男女）・バレーボール（男）・バドミントン（男女）・サッカー・バスケットボール（男女）・柔道・剣道・弓道・空手道・水泳（男）・ゴルフ

〈本学参加学生数〉　372名
〈成績〉　35大学中5位

8月

1日　保健管理センター所長に保坂教授（眼科学講座）が発令された
10日　昭和59年度納骨式（於　本学納骨堂）

9月

5日　体育大会
（学年対抗）サッカー・バスケットボール・駅伝・すもう・2,000mリレー
（有志対抗）ソフトボール・バレーボール
主催　学生

体育大会

26日　昭和59年度解剖体慰霊式並びに文部大臣感謝状伝達式
（於　体育館・第1セミナー室）
29日　学位記授与式（於　学長室）
（学位記授与者　4名）

10月

1日～S60 3月31日　〈本学参加種目〉ラグビー・スキー
（主管校　山形大学医学部）
〈本学参加学生数〉　100名
29日～11月2日　新入生研修第2回目（31日(水)は除く）
（於　一般教育会議室・職員研修施設）

11月

1日　附属図書館長に石橋教授（法医学講座）が発令された

12月

16日　スキー教室（於　北大雪スキー場）
～17日　講師4名　厚生補導委員会委員1名　参加学生36名

スキー教室

25日　学位記授与式（於　学長室）
（学位記授与者　6名）

昭和60年

1月

22日～30日　スポーツ大会（バレーボール・雪中サッカー・雪中リレー）　主催　学生
26日～27日　昭和60年度大学入学者選抜共通第1次学力試験
（本学会場　600名）

2月

13日　星野教授最終講義
（於　第7講義室）

3月

4日～5日　昭和60年度旭川医科大学入学試験
（志願者　507名）
8日　昭和60年度旭川医科大学大学院入学試験
（志願者　10名）
13日　星野教授歓送式
（於　臨床第3講義室）
14日　昭和60年度旭川医科大学入学試験合格者発表
（120名）
16日　昭和60年度旭川医科大学大学院入学試験合格者発表（10名）
25日　第7回卒業証書授与式（於　体育館）
（卒業生　113名）
学位記授与式（於　第1会議室）
（学位記授与者　9名）

（庶務課・学生課）

研　究　室　紹　介

■ 化　学 ■　　平塚寿章

化学研究室は、昭和48年に内田教授を中心に平塚（当時助手）、村上（教務職員）、沢田（文部事務官）の4人で発足した。沢田はその後北大へ転勤となり最近姓が変ったばかりである。その後任として中村事務官が入った他、現在まで人員に変化はない。教育面では一、二年生に対し講義と実習を担当している。内田は大学院生も担当している。実習は3人で6テーマを分担して指導しており、全員午後中出ずっぱりである。

一方、この10年余り主として筋肉タンパク質に関する研究も続けられている。内田と村上は、タンパク質の分析法の常法である二次元電気泳動の手法を、従来のものから筋肉タンパク質の分析に適したものへと改良し、これを主な武器として使っている。この方法を使うと見事な電気泳動パターンが得られ、これは他大学の研究者達も賞賛するところである。従って学内の他の講座との共同研究も盛んで、現在泌尿器科の徳中講師も“膀胱括約筋の筋型の決定”を主テーマにこちらで実験しており、一部はすでに J. Urol. 誌や日泌誌に発表されている。つい最近まで薬理学講座の指田助手も“虚血心筋の構造と構造タンパク質の変化”をテーマとして実験していたが、こちらの方は一区切りつき、その成果はJ. Molec. Cell. Cardiol. 誌に発表された。また第一内科からは大学院生の南先生が“マウス心筋および横隔膜筋のタンパク質の分析”を主テーマに大奮闘している。彼持ち前のファイトをもってすれば、成果が出るのもそう遠いことではあるまい。真夜中に当研究室を覗くと、他の講座の人達だけが実験しているような時もある。平塚はと言えば、本学の職員録には細菌学講座のページにも名前がのっているが、これは世を忍ぶ仮の姿であり、毎日出勤して来る所は化学研究室である。筋肉タンパク質であるミオシン分子について研究している。しかしこの2年間は、研究を進める上で必要に迫られて開発した蛍光性の生理活性ヌクレオチドが広い分野で使えることがわかり、合成のため暗室で過す日が続き、お陰で夜目が効くようになった。頼まれれば国内はもとより外国にも試薬を持って実験しに行くので、“国際版富山の薬売り”と言う人もいる。しかし、この薬屋も社長、製造係、プロパー皆一人でやっているので、供給が需要に追いつかず現在倒産寸前である。

最後に、中村事務官は今や当研究室にとって無くてはならない人となっている。彼女は論文のタイプ打ちや事務的な仕事の他写真の現像・焼き付けなど実験の一部も手伝ってくれる。毎日皆が教育・研究に専念できる様に細かなところまで気を配ってくれる。彼女の席は草花の鉢植に囲まれており、文字通り“化学の花”である。

（化学　助教授）

駐車場問題専門委員会から

旭川医科大学は、教職員用駐車場として 368台、学生用 117台、来学者用21台、来院者（患者）用 224台、緊急用6台の計 736台という膨大な駐車スペースを持っていますが、現今のモータリゼーション社会を反映して、これでも著しい不足を来しております。しかし、これ以上駐車場を増設すると、大学の環境は車に埋め尽された殺伐たるものとなりましょう。その論議の前に、現在の社会情勢では、予算上、増設は全く不可能なことです。ではどうするか？緊急度、必要度に応じて、駐車場利用を許可制とするなど、規制システム以外にはないでしょう。しかし、厳しいチェックシステムを持たない、というより持ち得ない故に、残念ながら規制は守られぬ規制となっております。医科大学人としてあるまじき行為――許可されていない教職員、学生の車の来院者用駐車場への乗り入れ――によって、来院者駐車場があふれ、来院者の車が病院前の此処かしこに、路上駐車を余儀無くさせられているのが現状です。

こゝ数年間、当委員会は駐車規制と啓蒙に鋭意努力して参りましたが、努力の限界にきております。最近、当委員会宛に投書がありましたのでここに紹介し、旭川医科大学の諸賢に自粛と協力をお願いする次第です。

最近、どこの大学でも悩みのたねのひとつに駐車場問題があるようである。本学も例外ではなく、構内での路上駐車、駐車場への無許可駐車は跡を絶たない。教職員が主要門、駐車場で規制をする。違反車は殆どない。だが、教職員では四六時中規制はできない。徐々に違反車が増える。又、規制をする。……。イタチごっこである。

昨年8月、本学東側の市道が駐車禁止になった。それまで日中で50台前後路上駐車していたのが全くなくなった。ものすごい効き目である。構内での違反駐車には罰則がない。注意に止めるだけである。これだけでは絶対的な効き目がない。何か罰則が必要なのかもしれない。

ルール違反をしている者の殆どは、最高学府である大学で働き、そして大学で学ぶ人達だ。罰則が無ければルールを守れないとは思いたくない。だが実際はそのようである。同じ大学人として悲しい。

では規制をしなければどうなるか。“構内では歩行者は自動車に優先する”という理想（原則）は踏みにじられ、大学は“狭く危険このうえない場所”と化すであろう。そんなことが許されていいわけはない。そのためにルールを決めたのだ。ルールに従うのではない。守るのだ。守るのは当りまえだ。この当り前ができていない。

一人ひとりが“空きカンを自然の中に投げ捨てるわけにはいかない”と思うためには、実に幅広く深い教養と知性が働かなければならないという説もある。車に関してこの程度のルールを守るためには、どの程度の教養と

知性が必要か、わからないが、大学人にとってそれほど難しいことだろうか。〈1月17日付、匿名、原文のまま〉

（駐車場問題専門委員会）

スキー教室

12月16日(日)、17日(月)の両日に、紋別郡白滝村の北大雪スキー場において、第1学年から第4学年までの学生36名（男子30名、女子6名）が参加し、スキー教室が行われた。

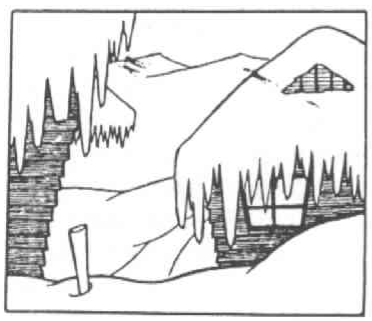
1日目は4名の指導員ごとに初級班・中級班・上級班（2班）に分かれ、強風の中それぞれ基礎から指導を受け、夜には前回スキー教室の8㎜に目を凝らした。また会食の後、恒例となった学生、指導員、職員を交えた懇親会も行われ盛会であった。2日目には、風もやや収まり、前日の指導で自信も深まり昼食の間も惜しんで、存分に滑り込んでいた。

（学生課）

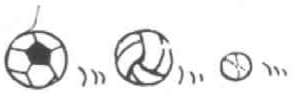
学生証の査証及び交付について

学生証は3年間有効ですが毎年4月に査証を受けなければなりません。60年度は4月1日(月)より学生課学生係において学生証の査証及び交付を行いますが、昭和57年度入学者については新学生証の交付、昭和57年度入学者以外の学生は査証となるので、全員学生証を持参すること。

（学生課）



サークル紹介



本学には現在、体育系31、文化系29の学生団体があり、延1,168名の学生諸君が各サークルに参加し、活動しています。課外活動は各自の自発性を存分に発揮できる場であり、各サークルはそれぞれ多彩な活動を展開しています。昼休み・放課後のひとときを、円満な人格の養成のために、あるいは健康な心身の育成のために、各自の個性・趣味・能力に応じたサークルで活動すると良いでしょう。次のサークルから「サークル紹介」が寄稿されたので、紹介します。

（学生課）

体育系

ラグビー部

全国的にラグビー熱が高まり、冬のスポーツとして、競技場で、ブラウン管で人々を熱狂させる頃、旭医ラグビー部は冬眠の真最中である。むろんＴＶに映る試合のレベルと我々とでは比べる術もなく、彼等との共通点といえば、ラグビーが好きだということだけであろうか。しかし、ラグビーの魅力はそこにある。大学に入ってからラグビーを始めた者も、夏までには、いっぱしのラガー（ラグビーの虫）に変えてしまうのである。

今年も、旭川の短い夏は、新しいラグビーの虫を加えて活気に溢れるはずである。

（責任者　北田正博）

部員数	経　　費	活　　動
35	会費 月額 1,000 遠征費自己負担	6/30～7/3北海道ラグビーフットボール選手権大会Fブロック(2位)、10/1～10/10東医体(4位) 旭川ラグビー協会・北海道ラグビー協会加入

準硬式野球部

そもそも野球好きには、ふた通りあるようである。"野球がしたくてしたくてたまらない者"と"何故か知らぬが、気付いた時にはバットを握り、そして次に気付いた時には、その世界から抜けられなくなっていた者"である。結局どちらも、好きには変わりなく、試合に勝ちたいのは同じなのだ。最近我々は優勝を目の前にし、あと一歩で涙を飲む事が残念ながら多い。野球好きにとって、これ程、くやしい事はない。「今年こそ優勝を！」……この言葉を今年で終わりにしようと、我々は日々練習に励んでいるのである。

（責任者　白井　勝）

部員数	経　　費	活　　動
28	会費 年額10,000円 遠征費自己負担 (年間約4回)	6月春季リーグ戦2部(3位)、7月地区体(2回戦)、8月東医体(4位)、9月秋季大会(2位) 北海道大学準硬式野球連盟加入

卓　球　部

卓球部は総員40人のクラブなので、色々な人がいて、実に味のあるクラブである。卓球自体は個人競技ではあるが、クラブ内でいろいろな催しなどがあり、交流は盛んである。

練習は夏は週4回で、冬は週3回。春休みには合宿もあり、充実した練習ができる。しかし、クラブは個人を束縛することなく、自主性を尊重している。

卓球は確かに暗いスポーツかもしれないが、クラブ自体は明るく、楽しい。最初はキツイかもしれないが、大学生活を充実して過ごすことができるクラブである。

（文責　栗栖康滋）

部員数	経　　費	活　　動
40	会費 必要なつど徴収(2,000円) 遠征費自己負担	5月北海道医科歯科大会(優勝)、5月学連春期大会(2部校)、8月東医体(決勝リーグ進出)、10月学連秋期大会(2部校)、10月北医体(優勝)

陸　上　競　技　部

私達、医学生にとって、スポーツというものが、いかなる意味をもつのかといいますと、人々の健康をあずかる者として自分の体を管理することは必然であると考えます。我がクラブは、肉体的というより精神的な鍛練を第一の目標とし、日々激しい練習を続けています。大会に勝つことを第一の目標としないあたり、他のクラブとは趣きを異にしていますが、私達はこの雄大な自然の中で練習を続けられることに、喜びを感じているのです。大雪連峰をながめながらのジョギングは、まさに最高です。健康…それが私達のクラブの全てです。

（文責　野津　司）

部員数	経　　費	活　　動
13	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	6/23～6/24北海道学生選手権、7/8地区体(5位)、7/29～7/30東医体(1位)、8/12全日本医歯薬獣医(3位) 北海道学生陸上競技連盟加入

スキー部

我が部は、アルペンとノルディックの２部門に分かれ、毎年３月末に行われる東医体を目標に活動しています。57年度・58年度は、北大をおさえ、見事に優勝をさらい、旭医旋風をまきおこしました。定期的な練習は、水・土の放課後ですが、　自主トレに励む者も多く、講議棟ロビーの一角を占め(皆さんごめんなさい！)、一年中、スキー野郎がゴロゴロしています。ｂｕｔ！年中、競技のことばかりを考えているわけではありません。お花見・ダンスパーティー主催・スキー遠足etc と、様々なことを行い、只今、元気一杯作動中です。

（文責　谷　隆子）

部員数	経　　費	活　　動
65	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	7/2北海道学生スキー連盟駅伝(２位)、1/7全日本Ａ級クロスカントリー、1/13北海道北地区国体予選、2/2～2/3北海道学生スキー選手権、3/27～3/29東医体(予定) 全日本・北海道スキー連盟加入

ゴルフ部

御入学おめでとうございます。わが旭医のゴルフ部は「大雪山カントリークラブ」という36ホールもある大きなゴルフ場で、活動をおこなっています。練習は水曜と土曜の週２回で、先輩が車でおくってくれます。せまい部屋での勉強のあと、北海道の大自然をバックにおもいっきりボールを飛ばすのは、実に最高です。みんな上級生になってから、ゴルフをやりたい、ならいたいといってくる人が多いようです。みなさんも後でそう後悔しないように、今のうちからはじめましょう。それから、一般的にゴルフというものはお金がかかるといわれていますが、わがゴルフ部では、ほとんどただも同然で好きなだけボールを打て、ホールまでまわれるのです。今、ゴルフは学生たちの間で、ナウいスポーツとしてブームをひきおこしています。先輩たちも指導熱心な人が多く、すぐに上達します。なお、去年の東医体では準優勝という輝かしい成績もおさめています。あまりむずかしく考えずに気軽に入部してみませんか。今、ゴルフをはじめるには一番適切な時期だと思います。

（責任者　菅野晴美）

部員数	経　　費	活　　動
23	会費 月額 1,500円 遠征費自己負担	6月大学対抗Ｂブロック(2位)、7月学生選手権(個人2位)、7月三校対抗、７月～８月東医体(団体準優勝・個人２位)、8月北海道学生新人戦 北海道学生ゴルフ連盟加入

ボディビルディング部

筋肉モリモリのムキムキマン達が、自分のポーズに見とれ、恍惚の微笑を浮べる。そんな光景を連想しがちですが、実はそうではありません。（中にはそんな方もいるようですが。)我が部は総合的基礎体力の向上を目的とし、主に昼休みという短い練習時間の中で、最も効果的な内容をこなしています。男は力があった方が良いのです。女性はシェイプアップに最適です。他クラブで活躍したい貴方、もてたい貴方、是非一度、体育館２階のトレーニングルームに見に来て下さい。

（責任者　山口聖隆）

部員数	経　　費	活　　動
	会費 月額 1,000円	５月中旬春季全道学生パワーリフティング大会(２位)、10月中旬秋季全道学生パワーリ

16		フティング大会(2位)、12月上旬全道学生パワーリフティング新人戦(2位) 日本・全道学生パワーリフティング協会加入

硬式庭球部

新たに旭川医大生となられる諸君へ、大学生になったなら必ず何かのスポーツ系クラブに入ることを勧めます。特に硬式テニス部では個人参加のトーナメントと団体戦のふた通りの大会があり個人の努力でどんどん上達していくのです。ところで近頃、テニスというと軟弱、ミーハーの代名詞のように思われています。確かに遊びながらテニスをするのも楽しいものです。しかし勝つためのテニス、勝利を目指して毎日練習を繰り返した後に、ようやく勝つことのできた時の喜びはさらに大きなものです。みなさんも僕たちと一緒に勝利を目指しませんか。

(責任者　北村晋逸)

部員数	経　　費	活　　動
46	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	北海道王座リーグ2部(1位) 北日本医科歯科学生体育大会(ベスト4)、東医体(2回戦) 北海道学生テニス連盟加入

バドミントン部

去年の旭医のバドミントン部は、東医体の団体戦において男女の団体戦ともベスト8という優秀な成績を収めることができ、盛り上がりを見せています。現在、4年生の佐藤部長以下、20数名の人たちが入部していますがちなみに去年の新入部員は全て初心者でした。このように、ここ旭医のバドミントン部員は、大学に入ってから始めたという人が多数を占めます。練習は厳しいですが楽しい先輩が多いのでみんな張りあいをもって参加しています。なお、練習日は月・金曜日は午後5時からで水曜日は午後1時から各2時間です。

(文責　花岡淳一)

部員数	経　　費	活　　動
30	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	8月東医体 (男女共にベスト8進出)

バスケットボール部(男)

バスケットの好きな皆さん、男子バスケット部に入りませんか。僕達は、根っからバスケットが好きで、暇を見つけては体育館に行きシュートを打っている。そんな男達です。こんな僕達から、これからの大学生活に期待と不安を持っているあなた達に一言。単調な毎日に活力を与え、生活のリズムになる様な部活動には是非とも参加すべきです。そして、各学年の先輩達と交流を深めながらどんどん良い所を吸収していって下さい。僕達は、あなたたちがそんな場としてバスケット部を選んでくれるのを心から期待しています。マネージャーも募集中。

(責任者　梶野浩樹)

部員数	経　　費	活　　動
21	会費 月額 500～ 1,000円	5/19～5/20北医体(4位)、6/7春季北海道学生バスケットボール選手権大会(8位)、7

	遠征費自己負担	7月中旬地区体(1回戦敗退) 7/25～7/29東医体（3回戦敗退)、10/18秋季北海道バスケットボール選手権大会（3回戦敗退) 全日本学生・北海道学生・旭川地区バスケットボール協会加入

柔　道　部

現在、柔道部は、6年1名、5年2名、3年4名、2年1名、1年2名と人数不足に直面している。上の学年を除くと実質的に活動に参加できる人数は限られている。

昨年の東医体では、わずかの差で予選リーグを勝ち抜くことができなかった。しかし、今年こそは、決勝リーグに進出しようとみんな頑張っている。個人の力の差は他大学と、そんなに違わないと、みんながわかっているからだ。

今年を勝ち抜くためにも、我々柔道部は、新しい人材、若い人材を必要としている。現在の部員の半数以上は、大学に入ってから柔道を始めた人達であるから、初心者でも大歓迎だ。

我々の練習は週3回、1日2時間程度であり、アルバイトとの兼ね合いもうまくいくはずである。また、我が部は、部費としては一切徴収しないので経済的負担は、さほどかからない。

新入生諸君、是非我が柔道部へ。

（文責　尾形文智）

部員数	経　費	活　動
10	会費 無料 遠征費自己負担	8/3～8/4東医体 （予選リーグ3位敗退） 旭川柔道連盟加入

サ　ッ　カ　ー　部

さてみなさん、世界には数多くのスポーツがありますが、その内で最も世界的に人気もあり盛んなスポーツは何でしょうか？　野球！全然ちがいます。ラグビー！いやいや、バレー！全く違います。答えはサッカーです。日本やアメリカにおいては、イマイチ人気はありませんがその他の全世界、特に南米やヨーロッパにおいては、絶大な人気を誇り、その比は日本のプロ野球どころではなく4年に1度開かれるワールドカップは、オリンピックをもしのぐと、言われるほどであり、チームの勝敗をめぐって国の間で戦争すら起こるほどです。

そこで我々の旭医サッカー部ですが、サッカーをこよなく愛する20数名よりなり、キャプテンを中心として自主的にかつハードな練習を行い、なんといっても旭医大唯一の全道学生リーグ1部所属チームです。

また、学生主催のソフトボール大会においても優勝数回を誇る強豪チームでもあります。

ですからサッカー好きの君も、サッカーにあまり興味のない君も一度グランドに足を運んで下さい！

ちなみにサッカーマガジンに旭医サッカー部は載りました。

（文責　岩崎倫政）

部員数	経　費	活　動
27	会費 月額 2,000円 遠征費自己負担	5/28～5/30北医体(4位)、7/7～7/9地区体(3位)、7/24～7/26東医体(3回戦敗退)、6月～9月末北海道学生リーグ1部(4位)、6月～9月末旭川社会人サッカーリーグ1部(5位)、10/28北海道医歯学生サッカー大会(1位)

バレーボール部

バレー部は現在部員数が約25名で、夏場は週4日、冬場は週3日の練習を行っています。部員は、縦にも横にも団結が強く和気あいあいの雰囲気です。この気の合った部員のなかから作りだされるコンビバレーは絶妙で、旭医のお実芸とされています。

昨年は、東医体に出場し、メダルは逃したもののベスト8に入り、全道の大学リーグ戦では3部を確保し、今年につなげるうえで奮闘した一年でした。今年は主力として活躍してくれた6年生が抜けてしまいましたが、他の東医体レギュラー5名は健在なので、昨年達成できなかった東医体優勝を目標に、部員一同練習に励みたいと

思っています。

ちなみに、部員の大半はバレー経験ゼロで入部してきますが、半年もすると一人前のプレーヤーになっていきます。大学で何かをやってみたい方、あり余るエネルギーをどこかに発散したい方、是非一度バレー部の練習を見にきてみませんか。お待ちしております。

（文責　鈴木義隆）

部員数	経　　費	活　　動
25	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	4月下旬春季リーグ3部(4位)、6月中旬道東リーグ(3位)、7月上旬地区体(ベスト8)、7月下旬東医体(ベスト8)、10月中旬秋季リーグ3部(5位) 日本・旭川バレーボール協会 北海道バレーボール連盟加入

剣　道　部

東医体3位という輝かしい成績で10年目を迎えた我が剣道部を、更にＪＵＭＰ　ＵＰさせるのは、そうあなたがた新入生です。剣道部員にも練習が好きな人とそうでない人がいて、でも各々色々な分野で部を盛り上げています。練習に命をかけるのもいいし、更に独自の分野で活躍するのもいいでしょう。とにかく一緒にクラブやりませんか。泣きごと一つ。女子団体戦が組めません。男子と共に段位、経験を問わず大歓迎です。

武道場のドアが開いてフレッシュな顔が恥ずかしそうに入って来るのを部員一同待っています。

（責任者　山下武廣）

部員数	経　　費	活　　動
37	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	7月上旬北海道地区医学部対抗剣道大会団体戦・新人戦(2位)、7月下旬東医体(3位)、女子個人戦(ベスト16)、9月上旬北海道医歯薬学生剣道大会個人戦(優勝) 旭川剣道連盟加入

山　岳　部

春・夏・秋・冬 我々に、そのたおだやかな姿を忘れ得ぬものにしてくれる大雪山をはじめ、北海道には、様々な山々があります。

新緑の香り、照りつける陽射し、あざやかな紅葉、しんしんと降りつもる粉雪、山は四季それぞれの姿を見せてくれます。

我々は、四季ともに山に在り、萌える草をつかみ、緑の風に吹かれ、吹雪をつき、万天の星に抱かれて酒をくみかわす、温泉大好き集団です。

（文責　鳥家良輔）

部員数	経　　費	活　　動
20	会費 月額 200円	5月春山合宿(十勝連峰)、7月夏山合宿(大雪山)、12月冬山合宿(大雪山)

弓　道　部

まずは活動欄をみてもらおうかな。東医体1位！全医体2位！光っているんでないかい。そして何と東医体をこの旭川で成功させてしまったというんだから2度びっくり！地の利を生かして勝ったんだろうって？それが素人の考え。そもそも弓道とは武道を越えた武道、高度な精神力を要求されるのですよ。一射入魂。夢皆中。どうして弓をひくのと問われれば、そこに的があるからさと答える境地。これが弓道なんです。今年は全医体も旭川で行われる。全医体制覇の喜びを共に味わいたいと考えるあなた、特に女の子、おじさんは道場で待っているよ。

（文責　佐藤　紀）

部員数	経　　費	活　　動
25	会費 月額 1,000円	6月北海道学生弓道選手権大会(2位)、7月下旬東医体(1位)、8月上旬全医体(2位)、11月上旬北海道学生弓道争覇

	遠征費自己負担（道内約 5,000円）	戦3部リーグ（1位）・新人戦（7位） 北海道学生弓道連盟加入

ワンダーフォーゲル部

新入生のみなさん、入学おめでとう。

我がW. V. 部は発足10数年来、北海道の大自然を相手に山行を重ねてきました。また最高の盛り上がりを見せるコンパ等、ユニークでしかもエネルギッシュな仲間の集まりです。

北海道の山々と広大な自然を愛し、人と人の出会いを大切にしている男女諸君、ぼくらは君達を待っている。来れW. V. 部へ!!

（責任者　岡本幸一郎）

部員数	経　　費	活　　動
23	会費 月額 500円 遠征費自己負担	5/1～5/2十勝三段山山スキー、5/20旭岳山スキー、6/9～6/10十勝ポンピ沢、6/13～6/14暑寒別岳・雨竜沼、7/9～7/13知床縦走・道東、10/7高根が原、12/23～12/24富良野スキー

大東流合気武道クラブ

我が大東流合気道クラブは部員13名、ＯＢ４名のよくまとまったクラブです。大東流合気柔術は太刀、短刀に対する攻防など様々な技術を含んでおり、これを身につければ護身術としてはもちろんのこと、精神修練にもつながります。体に自身のある人、ない人は問いません。合気道のもつ奥深さを少しでも知ろうとする熱意のある諸君を待ってるぜ！女子部員も２名おり、武道に憧れる大和撫子も安心して入部できます。医大の中で寸分のスキもみせない人を見かけたら、それはきっと合気道部員でしょう。

（文責　林　時仲）

部員数	経　　費	活　　動
13	会費 月額 500円 遠征費・昇段級審査料その他若干自己負担	7/29～7/30全道学生合気道大会(於北大)、8/5～8/6全国大東流合気武道演武大会(於 網走) 大東流合気武道旭川支部・大東流合気武道総本部(大東館)加入

軟式庭球部“アップルズ”

私たち軟式庭球部は、３年前に部になったばかりですが、現在は、部員23名、ＯＢ会々員13名ととても充実しています。このクラブの特徴は、下記の様に多くの対外試合に参加して、テニスの技術の向上を目ざす一面と、気軽にテニスを楽しむという同好会的な一面を兼ね備えているということでしょう。ですから決して堅苦しくはありませんし、また、経験者には多くの活躍の場も与えられます。北海道のすがすがしい夏には軟式テニスが一番です。どうぞ一度テニスコートに遊びに来て下さい。やさしい先輩たちがあなたを待っています。

（責任者　井上光太郎）

部員数	経　　費	活　　動
23	会費 月額 1,000円 遠征費自己負担	6/2～6/3加盟団体戦C級（2位)、6/30～7/1旭川地区対抗戦(4位)、7/7～7/8地区体(2回戦敗退)、7/15～7/16北海道医科歯科戦(2位)、7/27～7/31東医体Dブロック(3位) 旭川軟式庭球連盟加入

硬式テニス同好会

毎週水・土曜の午後、オールウェザーコートで活動しており、また土曜には他のコートも借りている。年間通しての活動は、期間が4～10月と限られているだけに、短いように感じられる。今年は是非シーズンオフの時期にインドアでプレーしたい。合宿はゴールデンウィークと夏休みに各1回あり、昨年は芦別とニセコで行った。合宿はなんといっても楽しいものであり、参加する意義はあると思う。テニスを楽しむほかなんでも楽しみますので、期待して下さい。なお写真は昨年のニセコでの合宿中に羊蹄山をバックに写したものである。

（文責　合谷木徹）

部員数	経　　費	活　　動
30	会費 年額 3,000円	毎週水・土曜練習 5月芦別合宿、7月ニセコ合宿

白い恋人（基礎スキー&山岳スキー同好会）

『あらゆるスポーツの中で、その王者に値するスポーツがあるとすれば、それは、スキーをおいてほかにはない。スキーほど、筋肉を鍛え、からだをしなやかにし、しかも弾力的にし、注意力を高め、巧緻性を養い、意志力を強め、心気を爽快にするスポーツは、ほかにない。』

これは、ノルウエーの探険家フリチョフ・ナンセンの言葉ですが、スキーの素晴らしさは、この言葉の中に、そのすべてが語り尽されています。

私たちは、この「スポーツの王者、スキー」を真に愛する人間の集まりです。

（責任者　矢倉幸久）

部員数	経　　費	活　　動
59	会費 年額 2,000円 遠征費自己負担 （合宿1回 25,000円程度）	7/16～7/17赤岳夏スキー合宿、1/9～1/11富良野スキー合宿、3/12～3/16ニセコスキー合宿(予定)、3/17～3/19北海道学生基礎スキー大会出場(予定) 北海道学生基礎スキー連盟加入

女子バスケットボール部

昭和59年度東医体優勝。これが私達、旭川医大女子バスケット部の最終成績です。結成5年目にしてようやく勝ち得た栄冠ですが、全て、部員一同1年間一生懸命バスケットを続けてきた成果です。しかし、一度頂点にのぼりつめてしまったら、それを維持しつづけるのはもっと困難な事です。そんな苦しい時期にさしかかっている今、私達には、あなたたち新入生の若い力がぜひとも必要なのです。学年間の結束が強く、明るくたくましい女性たちがそろっている女子バスケット部にあなたもプレイヤー、マネージャーとして入部してみませんか？

（責任者　森下奈緒美）

部員数	経　　費	活　　動
10	会費 月額 500～ 1,000円 遠征費自己負担	5/19～5/20北医体(4位)、6/7春季北海道学生バスケットボール選手権大会(1回戦敗退)、7/26～7/29東医体(優勝)、10/18秋季北海道バスケットボール選手権大会(2回戦敗退) 全日本学生・北海道学生・旭川地区バスケットボール協会加入

文化系

写　真　部

写真部は本学のクラブの中で最も古いクラブの1つであります。活動は、大学の写真部として（いわゆるカメラクラブとは違い）“作品としての写真の製作”を行っており、個々の作品を持ち寄り互いに批評し合い、ある時は芸術論を闘わせ、またある時は徹夜で暗室に籠もり共同で技術を研究し、夏には撮影旅行と称しキャンプに行っております。創作活動は、とかく個人プレーになりがちなものですが、ここに集団であることが重要であるわけであります。最近では旭川の他の大学の写真部とも交流を深め一層盛り上がっております。

（責任者　岡田瑞穂）

部長作品「ベナレスの少年」

部員数	経　　費	活　　動
24	会費 月額 500円	6月大学祭写真展開催、10月東海大学写真部と合同合評会12月北海道写真連盟展参加（岡田)、12月「旭川学生写真連盟」(仮称)設立準備会発足、2月冬の写真展開催予定

医　療　研　究　会

私たちは医学生として自然科学としての“医学”はいやというほど学びますが、将来医師として実践していく“医療”については皆無といってよいほど知る機会は少ないものです。現在、医療はもとよりそれを取り巻く情勢は増々きびしい状況を呈してきています。特に北海道の地域では生活や経済的な要因によって医療がおびやかされていることがこの間の活動で明らかになっています。医大祭とフィールドワークを軸に学内における医療問題のオピニオンリーダーとしての役割を将来の医師像を模索しつつ担っていきたいと考えています。

（文責　松田　彰）

部員数	経　　費	活　　動
40	会費 月額300円 フィールドワーク 参加費自己負担	6月医大祭医学展 7月下旬フィールドワーク （紋別沼の上）

映　画　研　究　会

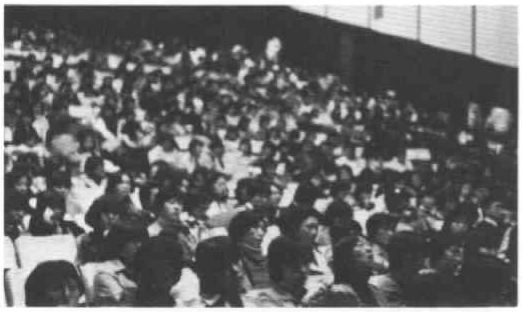
映研は、自分達の観たい映画を自分達の手で上映するというのが、クラブの主たる活動であるが、最近では、その他にマンスリー・ビデオという活動も加わり、クラブの活動にも厚みを増してきた。そして市民の映画サークルにも積極的に参加している。また、クラブの主旨に

は、はずれるがクラブ員の結束と健康の維持のため、ソフトボールを取り入れ、去年の学内スポーツ大会では、ソフトボール部門準優勝という成績であった。

クラブ内の雰囲気は明るく、部室では笑いが絶えない。

（責任者　渡辺晴司）

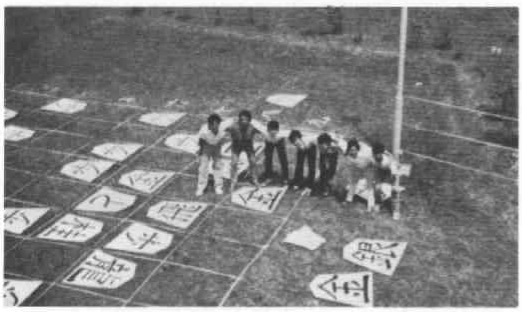
部員数	経　費	活　動
24	会費 月額 300円	4・5・6・9月マンスリービデオ上映会 シネマ連絡協議会加入



将　棋　部

ここ数年、道内の学生将棋界は北海道大学を中心に動いていました。しかし、それにストップをかけつつある大学があります。それが旭川医大なのです。59年度の春季大会は団体戦で、北大に３－４という接戦で敗れました。また、その前年は北大に勝ちながらも、勝ち数の差で敗れました。今年こそ、３度目の正直で、勝利をおさめたいのです。それにはフレッシュな新入生のパワーが必要です。将棋が好きな方、ぜひ将棋部に入部して下さい。私と一緒に全国大会へ行こうではありませんか。

（責任者　山口　亮　3段）



部員数	経　費	活　動
14	会費 無　料	5/3～5/5春季全道学生将棋大会(団体戦)準優勝　(個人戦)輿水ベスト8、10/10全道学生新人戦(団体戦)8位、11/23～11/25秋季全道学生将棋大会(団体戦)8位　(個人戦)輿水ベスト8 全道学生将棋連盟加入
	遠征費自己負担	

ＪＡＺＺ研究会

ＪＡＺＺ研究会は、ＪＡＺＺからＲＯＣＫにいたる幅広いジャンルにおけるインプロビゼーションの楽しさを追求しています。一度演奏を聞いてもらえばわかると思いますが、決して難解な事はやってません。とにかく楽しくなければ音楽じゃない、ぐらいのつもりでやってるので、音楽の好きな人なら絶対に満足してもらえると確信してます。音楽を聞くばかりでなく、やることによって、きっとあなたは何かを見つけるでしょう。とにかく楽しいクラブです。一度練習でも見にきて下さい。

（責任者　浅賀浩孝）

部員数	経　費	活　動
15	会費 月額 500円	6/16～6/17学祭ライブハウス出演、9/7旭川医大「音楽の夕べ」で演奏、11月ななかまど音楽祭、その他ブラス・アンサンブルとともに数多くのコンサート

ギ　タ　ー　部

早いもので、ギター部創設より６年が過ぎ去ろうとしております。その間、定期演奏会の開催、北海道ギター連盟への参加と、多くの場を踏まえ、さらには昨年の花見の成功等により、曲がりながらも、部としての団結が生まれてまいりました。現在、約12名の部員は、ギターの音色に惹かれたものの、ギターに触れたことのなかった者が大多数を占め、そのため、御指導下さる講師の先生には、苦労をかけておりますが、何分好きな者の集ま

りで、練習の度ごとの上達に喜びを分かち合っております。今年も7月には、演奏会を開く予定であります。
〈写真は昨年の演奏会のステージ〉

（責任者　野坂拓寿）

部員数	経　　費	活　　動
14	会費 月額 1,500	7/4文化会館小ホールにて第2回定期演奏会 北海道ギター連盟加入

ロック研究会

我々ロック研究会にとっての59年度は、大学から外への、医大から旭川4大学へ、そして旭川という市の中での音楽活動へと拡大を重ねていった、ロック研究会の短い歴史の中でも画期的な1年であった。最大の行事は去年11月に、市の主催する「ななかまど音楽祭」に、4大学の音楽団体『4U』として、ジャズ研と共に『4大学音楽祭』を企画し、「安全地帯」というゲストを招いて文化会館大ホールに盛大な音楽祭を成功させた事であろう。

『4U』は以後も積極的な交流を続けてゆくことになった。今まで低迷という感をまぬがれなかった大学の音楽活動の一端を荷ない盛り上げていくことを将来にも引き継いでゆきたい。1月に1年生がNHKヤングミュージックフェスティバル旭川大会に出演し、早くも新しい試みで上級生の権威を脅かしている。数年前にはほんの少人数で活動していた我がクラブも、幾つもバンドを持つ団体に成長した。とかくバンド内の活動にのみ終止しがちなクラブであるが、縦のつながりを重視して計画的な練習法など又理論の勉強も含めて、各人の質的な向上が望まれる。が、結局コンパに明け暮れるこの人生がうらめしい。

（文責　伊達　純）

部員数	経　　費	活　　動
24		5/1～5/2西武前広場GW特別コンサート依頼出演、6/8HBC公開ロックダンスコンテスト依頼出演、6/12医大祭プレフェスティバルコンサート、6/15～6/17医大祭ライヴハウス企画、10/28滝川国学院女子短大学祭依頼出演、11/4旭川市ななかまど音楽祭主催(4U)・11/6マチイMOVEコンサート出演、1/20NHKヤングミュージックフェスティバル旭川大会出演 4U(FOR YOU)加入

ブラス・アンサンブル

管楽器の深い味わいのある響きを追求している我が部は、昨年はJAZZ研究会の協力を得て、ジャズのビッグバンドを結成して大活躍しました。毎日のように練習し、ブラスはこのまま燃えつきてしまうのではないかと皆を驚かせていました。その甲斐もあってか人気も上昇、トロンボーンのKさんにはかわいいグルーピーまで出現しました。今年は、主力である先輩たちがあまり練習できなくなると思われるので、多数の新入生諸君の入部を期待してます。初心者も大歓迎。とにかく一度練習を見に来て下さい。JAZZ研もよろしく。

（文責　浅賀浩孝）

部員数	経　　費	活　　動
20	会費 月額 1,000円	6/14～6/17学祭コンサート、6/28旭川3大学合同トワイライト・コンサート、9/7旭川医大「音楽の夕べ」出演

室内合奏団

弦楽合奏同好会として発足して5年目となりましたが、今年度フルート奏者を迎えて室内合奏団と改称しました。

本年度は学祭でレスピーギの組曲「古代舞曲とアリア」

を、また9月の音楽の夕べではバッハの「組曲2番」を演奏しました。去春より卒業式の証書授与の際の伴奏を務めておりますが、本年も卒業生を送り出すべく3月に向けて練習にはげんでおります。

入学後初めて弦楽器を手にした学生の集団ですので、その上達は遅々としていますが、技術の向上と合奏の楽しさを求めて活動しております。

（責任者　安田淳美）

部員数	経　　費	活　　動
12	会費 月額 1,500円 合宿、演奏会などのため徴収	6/17学祭での演奏、9/7医大音楽系サークルの音楽の夕べ、12/22高木バイオリン教室の発表会

旅と鉄道研究会

私たちの会では、はっきりいって何もやりません。というのは極論であって実際は会員のそれぞれが山下清の如く、北海道、日本、世界を放浪しておるのです。故に当会員達は、チャリンコの会やワンゲルなどとカケモチの者がほとんどであるのです。新一年生たちは、4畳半に数百日もの間、入ったままで体内に悪い物が貯まりっ放しでありましょう。それを掃き出すには、スポーツがベストであります。それでも発散しきれずに困っている者は当会に籍を置いてみるのもよか。けれども実際に飛び回わるのは君自身なのだ。当会ではその旅の情報を互いに交換し合う集団なのであります。チャリンコで駆け、車で見知らぬ道を走り、鉄道で最北の町を目指す。各自心に決めた土地を目ざして、いや行き先など決めずに出るのも良かろう。とにかく、じっとしているのが嫌いな者の集まりです。

（責任者　吉田克成）

部員数	経　　費	活　　動
12	会費 無　料 旅行費自己負担	5月初旬ゴールデンウィークの旅 8月下旬夏休みの旅

天文同好会

初春、北海道の緑がさえわたる頃、クラブマン達は田舎に遊ぶ。北国の寒さも緩み、夜も幾分過ごしやすくなったからだ。野に川に田園に、クラブマン達の天文遊学精神は生きる。そして夜には、ゆったりと華麗にちりばめられた星空に酔う。都会人が危険な酒を楽しむ同じ夜に、クラブマン達は田舎で昔ながらの夜を愉しむ。なぜなら、星は遥かいにしえの時より同様に、男達の上に輝いているからだ。そして我々は、夜空は万人を公平に見おろしていることを知っている。――――こんな天文遊学を愉しみきることが、クラブマン達の真骨頂である。

（責任者　矢萩英一）

部員数	経　　費	活　　動
14	会費 無　料 遠征費自己負担 （合宿1回あたり 7,000円）	4/29～5/1吹上温泉白銀荘にて観測合宿 6/23～6/24層雲峡青少年旅行村にて観測合宿 11/2～11/5道東方面に観測旅行

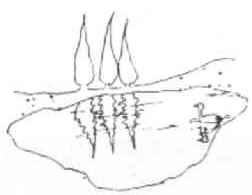
旅芸人CLUB

Performer：芸人

我々『旅芸人倶楽部』は、Performer集団である。世間一般でいうところの“演劇部”とは、その性格を異にする。我々の追求するものは、“笑い”である。人間は、“笑う”時無防備となる、何の嘘飾もない、裸である。この事は、現代に於いて最も欠けている事ではないだろうか？“病める現代に風刺でメスを”などとキドル気はない。我々は思想なき集団である。唯観る者に“笑い”を提供したいだけである。“笑い”を追求する我々に、今、注目願いたい。

（文責　竹内　恭）

部員数	経　　費	活　　動
12	会費 必要なつど徴収	6月旭川医科大学大学祭 11月東海大学大学祭



怨　外

建部高明

伊豆沼の思い出

数日前、宮城県の北部にある伊豆沼が渡り鳥の保護地に指定されたと報道された。テレビの画面には白鳥をはじめ沢山の渡り鳥の遊泳している伊豆沼が映し出された。小生には、この沼に思い出があり、といっても傷ついた白鳥を癒してあげたといったほのぼのとしたものではなく、或る寄生虫にかかわる思い出である。

昭和30年代の前半といえば、とくに農村地帯では様々な寄生虫が蔓延していた頃であった。大学を卒業して間もなく小生が研修していた病院は、伊豆沼の西方に広がる田園地帯のセンター病院であった。そういう土地柄のせいか、胃や胆管あるいは膵管への迷入といった蛔虫の悪戯にてこずるのは日常茶飯事だったし、また貧血の病人をみたらまずもって鉤虫（当時は十二指腸虫といっていた）の寄生を考えるのが常識であった。これに加えて、肝吸虫（肝ジストマ）に悩む病人にもしばしば遭遇し、その感染源が伊豆沼にあったという次第である。

御存知のように、肝吸虫は肝内胆管を主な住処とし、時には胆汁の流れをうつ滞させ、あるいは肝の炎症性反応、ひいては肝の線維化をもひきおこすといった厄介な代物である。稀ではあるが、夥しい数の肝吸虫が胆道系を占居したため著しい黄疸が現れ、遂にはメスをもって虫退治をした病人にもお目にかかった。また、薬物で肝吸虫を駆除することも極めて困難であり、当時繁用されていたスチブナールといったアンチモン製剤を静注しても、副作用の咳嗽発作がおこるだけで糞便中の虫卵数の減る気配は一向にみられなかった。

病院を訪れる肝吸虫症患者の多くは伊豆沼に面した半農半漁の部落の住民であった。聞くところによると、彼らは午前中に沼へ舟を出し、捕獲した魚類を刺身にして舟で昼食をとることを習慣にしていたとのことである。さて、この部落の全住民について検便をしてみたところ、なんと$\frac{1}{3}$程度に虫卵がみられ、不思議なことには虫卵陽性者のなかには離乳前の乳児も含まれていた。幸いなことには、大多数のものは無症状であり、肝機能にも異常がなかった。以来、新しい駆虫剤が誕生するたびに特定の虫卵保有者を対象として十二指腸液中の虫卵数を指標にして薬効を調べてみたが、効能あらたかな薬物にはついぞお目にかからなかった。

次に、疫学調査という程のおおげさなものではないが、時折伊豆沼へ舟を出してもらい、第1中間宿主とされているマメタニシの棲息状態を調べることにした。といっても沼に群生する蓮の葉の裏に付着していたマメタニシの密度を算出するといった程度のことであった。この作業は徒労に終ったせいか、その成果については全く記憶にないが、沼に栽培していたジュンサイを失敬しては病院に持ち帰り、これを肴に慰労の宴を設けたことだけが記憶に残っている。真偽のほどは定かでないが、後日、沼で死んだ魚から幼虫が水中へ脱出することがあり、沼の水から経口的に感染することがあると脅かされた。そこでジュンサイの恩恵にあずかった連中はひそかに検便をしていたようだったが、幸いにして被害者は出なかった。

その後現在に至るまで肝吸虫とはとんと疎遠であったが、或る知人が台湾へ旅行した際に川魚の刺身の入った粥を御馳走になったところ、この厄介な代物に憑りつかれたとのことである。台湾へおでかけの諸氏にはくれぐれもご用心と申し上げたい。

－昭和60年1月記－

（内科学第二講座　助教授）